

教師の育て方 – 教職大学院への期待 –

理事 小澤 秀子

■キーワードは「考える力」と「一人残らず」

OECD の国際学力到達度調査(PISA)で、フィンランドが前回に続いて世界トップに輝いたが、学ぶべきは充実した教師教育にあるようだ。先日ある TV ドキュメントでその一端が紹介された。

印象に残ったのは、教員養成大学の大学院生が行っている教育実習の一コマ。生徒 20 人程の小学校高学年の授業、生徒はそれぞれ自分たちで調べていて、教師役の学生は巡回して質問に答えたりしている。と、一人の生徒に気をとられ、質問したがっている別の生徒に気がつかないという場面があった。

一部始終を観察していた指導教官は、授業後にそのことを指摘。授業を行った学生は「早く質問に答えれば、その生徒が時間を空費しないで済んだと思うととても申し訳ない」と反省していた。指導教官と学生のやりとりからは、すべての生徒に「考える力」を確実に育てるという気概が伺えた。そのための指導力をしっかり身につけさせるというのが、フィンランドの教師教育だ。

先日フィンランドから取材に来日した TV プロデューサーの夫妻と会食する機会があったので、フィンランドが学力で世界トップになれる理由はどこにあると思うか質問した。答えは「基礎教育を徹底しているから」そして「フィンランドは人口が少なく(*ほぼ 520 万人)、少資源国。だからすべての人が大事。一人の落ちこぼしも許されない。基礎教育に力を入れざるを得ない」と続けた。彼らは「ハイレベルな教育では成功していない」と自国の教育に必ずしも満足はしていなかったが、一人残らず確実に育てるという国民共有の価値観は、学力の問題を超えて健全な社会を支える基盤となっている。

■信頼され任される教師

フィンランドでは、教師は教員養成大学の大学院で育てられ、6 ヶ月の教育実習が必須となっている。その間に不相当とみなされると教師にはなれない。教師になれるのは卒業生全体のわずか 10%という難関だという。しかし難関を突破して教師になれば、そこには信頼という椅子が待っている。

教育相は「現場の裁量を大幅に増やしている。我々は教師を信じている。日々生徒を見ている教師こそ生徒のことが一番よくわかる筈。すべてを教師に任せている。」と語る。

■教師がもつべき能力とは

実際に 1 クラス 20 人（日本では最高 40 人）もの生徒を指導するのは、容易なことではない。私自身も何度も失敗した苦い経験がある。教える内容にこだわり、何とか相手に「わかりました」といわせようと必死になると、相手の疑問も感動も見えない。「教える」のではなく、相手に考えさせ、行動させること、それを助けるのが教師なのだという姿勢の転換が必要である。それは「行動の見方」に対する基礎的視点の習得、それを土台にした「段階を踏んだ練習」によって育てることができる。今年 4 月にスタートする教職大学院では、ぜひともこのことを中核にした教師教育を行ってほしいと願っている。

JADEC ニュース 73 号 (2008/1 /) より